

## ● 制作

# 日常と非日常のあい—遺された時間へ還る都市型火葬場—

The Border Between the Ordinary and the Extraordinary: An Urban Crematorium Returning to the Time Left Behind

戸高 悠雅 園芸学研究所 環境園芸学専攻 ランドスケープ学コース (主指導教員: 章 俊華)  
TODAKA Yuga

## 1. 研究の背景と目的

近年、都市部においては火葬需要の集中による施設不足が深刻化している一方、長期的には人口減少に伴う火葬場の供給過多も予測されている。このような需給の不均衡に加え、火葬場は忌避施設として都市生活から切り離される傾向が強くなり、効率性や処理能力を優先した計画が主流である。その結果、火葬という行為に伴う遺族の心理的変化や、死を受容するための時間・空間の質については十分に議論されてこなかった。

そこで本研究では、火葬場のランドスケープに着目し、動線および視認体験の分析を通じて、建築と外部空間が人の心理的移行に与える影響を明らかにすることを目的とする。さらに、その知見を踏まえ、都市における火葬場の新たな空間像を設計提案として示す。

## 2. 研究方法

### (1) 火葬場における動線・視認体験の分析

本研究では、国内外の代表的な火葬場4事例を対象に、敷地構成およびアプローチ動線を平面図上で整理し、火葬場建築が歩行の過程においていつ、どの位置から、どの程度認識されるのかを分析する。分析にあたっては、建築が初めて視認される地点までの距離を示す「視認開始距離」、建築までの最短距離である「直線到達距離」、実際の歩行経路に沿った「歩行到達距離」を設定する。

さらに、これらの距離指標を基に、建築が早期に認識される度合いを示す「早期視認比率」、歩行体験の中で視認が占める割合を示す「視認体験比率」、および動線の迂回性を示す「迂回率」を算出し、各事例のアプローチ体験を比較する。これにより、視認のタイミングや遮蔽の操作が、火葬場への到達過程における歩行体験や心理的距離にどのような差異をもたらすのかを明らかにする。

### (2) 分析結果を踏まえた設計検討

前節で得られる動線および視認体験に関する分析結果を基に、火葬場における外部空間の構成および視認操作が、遺族の認識にどのような影響を与え得るのかを設計を通じて検討する。分析から導かれる視認のタイミングや遮蔽のあり方を空間構成に反映し、火葬中の時間をどのように認

識できる空間を火葬場が提供可能かを探る。

## 3. 調査・分析結果

### (1) 早期視認比率

図1、図2を分析の結果、事例ごとに動線の長さや形状は異なるものの、建築の視認特性には明確な差異が見られた。早い段階から建築全体が視認され続ける事例では、視認区間が長く、歩行距離に占める視認距離の割合が高い傾向にあった。一方で、地形や植栽、建築配置によって視認が一時的に遮蔽される事例では、視認区間が分断され、建築の認識が段階的に生じる構成となっていた。

これらの差異は、「早期視認比率」および「視認体験比率」に反映されており、同じ到達距離であっても、視認のタイミングや連続性によって体験の性質が異なることが数値的にも確認された。

	堀江野崎所	風の丘①	風の丘②	ホフハイデ①		
視認開始距離(Dv)	182.3	48.1	15.5	148.0	(m)	
直線到達距離(Dd)	42.9	112.2	74.4	134.4	(m)	
歩行到達距離(Dp)	75.5	154.6	75.6	169.3	(m)	
早期視認比率(Dd / Dv + Dd)	0.19	0.70	0.83	0.48		
視認体験比率(Dp / Dv + Dp)	0.29	0.76	0.83	0.53		
迂回率(Dp/Dd)	1.76	1.38	1.02	1.26		
	ホフハイデ②	ホフハイデ③	森の火葬場①	森の火葬場②	森の火葬場③	
	212.3	304.1	1.0	415.1	762.7	(m)
	87.3	48.1	400.1	184.4	272.3	(m)
	100.9	48.1	449.9	271.7	313.8	(m)
	0.29	0.14	1.00	0.31	0.26	
	0.32	0.14	1.00	0.40	0.29	
	1.16	1.00	1.12	1.47	1.15	

図1 視認距離と各指標の比較

### (2) 迂回率と視認体験比率

次に、視認特性と歩行体験の関係性について分析を行った。各事例において、「直線到達距離」と「歩行到達距離」を比較すると、動線の迂回性が高い事例ほど、建築への接近が段階的に進む構成となっていることが明らかとなった。

特に、迂回率が高い事例では、歩行の過程で視認と遮蔽が交互に現れ、単調な接近動作ではなく、複数の局面を持つアプローチ体験が形成されていた。一方、迂回率が低く、直線的な動線を持つ事例では、視認と歩行がほぼ同時に進行し、体験の変化が少ない傾向が見られた。

これらの結果から、動線の迂回性と視認操作は相互に関係しており、建築への物理的な接近の仕方が、視覚的な認識の進み方にも影響を与えていることが示された。

### (3) 入退場における庭の類似度と距離感

図3の各事例を比較すると、庭空間の類似度が高い構成で

は、植栽や空間スケール、視線の抜け方が共通しており、入場時と退場時で建築との距離感や空間的印象が変化しにくい。その結果、移動距離が確保されていても、体験は単一のシーンの反復にとどまり、認知の更新が生じにくい傾向であった。

一方、庭空間の構成や視線の方向性に差異が設けられている構成では、同一敷地内であっても、建築との距離感や空間の捉え方が入退場で明確に切り替えられている。庭の形態そのものに加え、建築の見え方や視線操作によって、異なる心理的フェーズが形成されている。

以上より、入退場における庭空間の類似度は、物理的距離とは独立して、心理的な距離感や体験の切り替わりに影響を与えていることが示された。

### (3) 小結と方針

本研究では、火葬場へのアプローチにおける視認のされ方と歩行経路の構成に着目し、早期視認比率、迂回率、視認体験比率という指標を用いて比較・分析を行った。

その結果、建物がいつ、どのように視界に立ち現れるかは、単なる距離や配置の問題ではなく、歩行経路における空間の折れや緩急、視線の遮断と開放の重なりによって形成されていることが明らかになった。特に、迂回率が高い事例では、物理的な距離の増加以上に、建物との心理的距離が段階的に

調整されており、視認体験比率の変化を通して、建築が目的地として一挙に提示されるのではなく、風景の一部として徐々に認知されていくプロセスが読み取れる。一方、迂回率が低く視認体験比率が高い事例では、早期から建物が強く意識され、到達までの体験が比較的単線的になる傾向であった。

これらの分析から、火葬場におけるアプローチ空間は、到達効率や視認性の高さ、周囲との関係性のみで評価されるべきではなく、「どの距離で、どの程度の時間、火葬場を意識し続けるのか」という体験の配分そのものが、火葬場の中での心的移行に深く関与していると考えられる。数値化された指標は、その質的な体験の違いを可視化する手がかりであり、視認と迂回の関係性を通して、建築と風景の間に生じる距離感を読み解くための基盤となる。

次章では、これらの分析結果を踏まえ、アプローチ空間がどのようにして日常から非日常へと連続的に転調していくのか、その空間構成のあり方について考察を進める。

### 参考文献

- [1] 宮澤安紀, 日本とイギリスと自然葬法—現代社会における死の物語の再編—, 北海道大学出版会, 2024
- [2] 日本建築学会, 弔う建築—終の空間としての火葬場—, 鹿島出版会, 2009

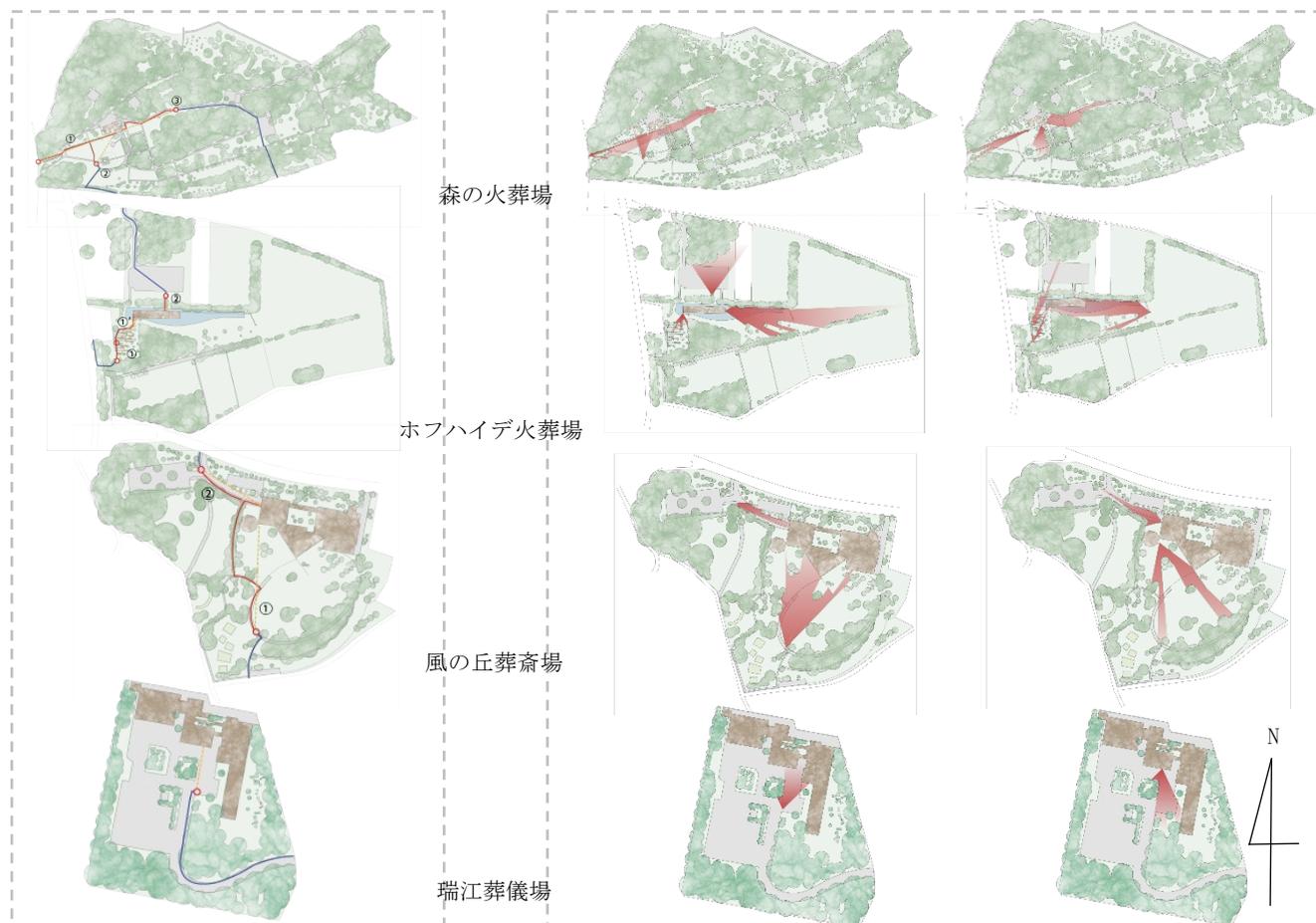


図2 視認距離の関係性

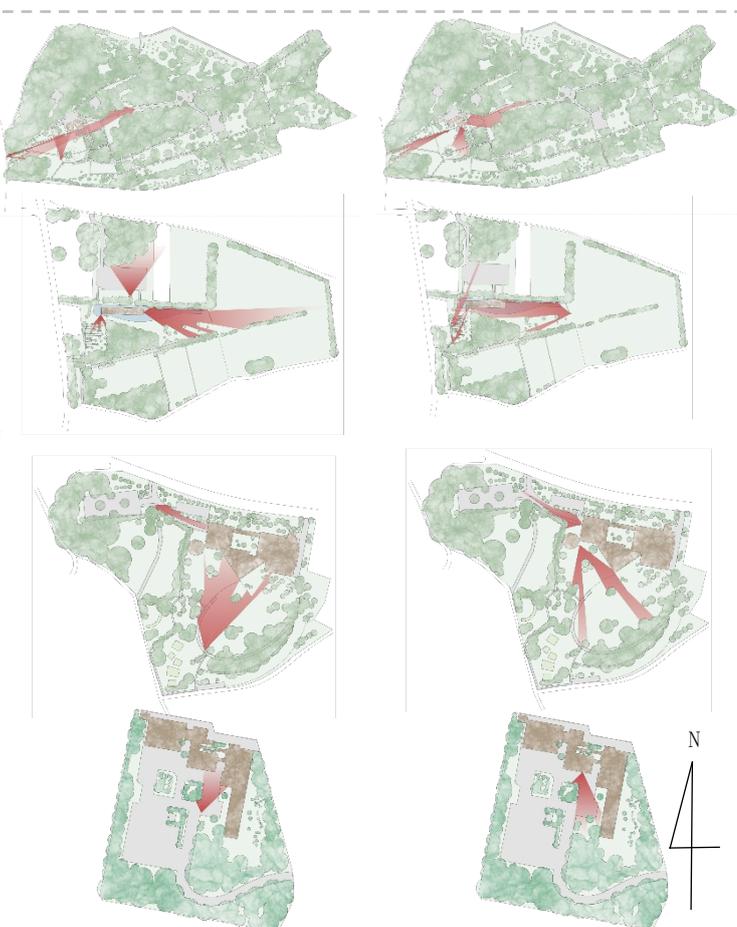


図3 入退場口の視認範囲と距離の関係性

#### 4. 設計提案「日常と非日常のあい—遺された時間へ還る都市型火葬場—」

##### 4-1. 設計方針「火葬の待ち時間に遺族へ兆しを見せる」

現在の都市型火葬場は、火葬という機能を効率的に成立させる一方で、遺族が故人の死を受け止めるための時間や空間を十分に扱えていない。火葬中には、本来、感情が追いつかない「空白の時間」が存在するはずであるが（図4）、現行の火葬場ではその時間が制度や過程の中で均質化され、重要視していない。

本提案では、火葬場が担いうる役割を、単なる処理施設としてではなく、「故人の死を認識するきっかけを持つ空間」として再定義する。遺族を中心に据え、火葬に至るまで、そして火葬後に生じる心理的な間を、風景や動線、距離感の操作によって可視化し、体験として立ち上げることを目的とする。火葬そのものは不可逆的であり、遺族が直接関与できる行為ではないからこそ、建築やランドスケープが介在し、故人との距離が変化していく過程や、認識が更新されていく時間を空間として支える必要がある。本設計では、視認や遮蔽、動線の分岐や重なりといった操作を通して、遺族が段階的に個人の死を受け止めるための余白を組み込む。

本計画は、火葬場において見過ごされてきた「認識のプロセス」そのものを設計対象とし、失われがちな死の経験を、風景として記憶に留める場をつくる試みである。

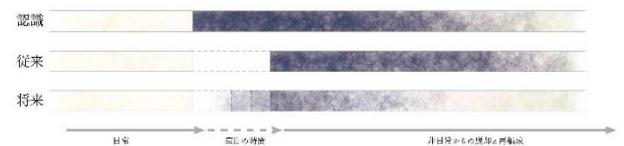
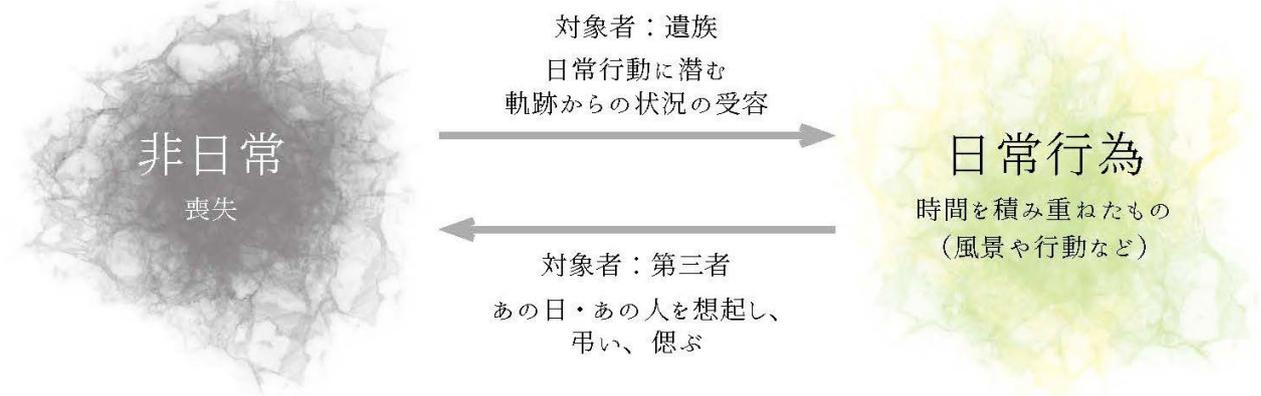


図4 空白の時間の提唱



・日常行為の種類3つの分類



図5 日常と非日常の関係性

##### ① 「日常」という名の風景を遺族が体験していく設計

都市の中での風景や無意識化する行動や感覚は「時間を積み重ねたこと」によって形成された行為・記憶であり、それが日常と化す。この日常を失われた火葬場の空間において、風景や体験、シークエンスによって、故人を失ってしまったという事実に気づくきっかけを点にさせていった。

##### ② 都心という状況下での人と「非日常」の関係の再編

日常を過ごす人に対して、この場所や周辺の忌避施設と化した寺院の墓地とのつながりを作り、そして火葬場の中でも「非日常」を見せていくことによって、個人の中に眠る「非日常」を呼び起こし、弔うことによって故人へ還元される。

##### 4-3. まとめ

近年、敷地利用の効率化や都市再開発が進む中で、火葬場は必須の機能を担いながらも、固定的なイメージによって都市から切り離され、忌避される存在として扱われがちである。しかし本研究が示すように、火葬場は人間の生と死の連続性を都市の中で引き受ける重要な場であり、その価値は機能の合理性のみでは測れない。

本提案は、火葬場を「見えない施設」として押し込めるのではなく、故人の死を認識するための風景を都市に組み込むという可能性を動線や風景の視点から示したものであり、今後の都市における葬送施設のあり方を再考する一つの視点を提示する。

(主査：木下 剛，副主査：章 俊華，霜田 亮佑)

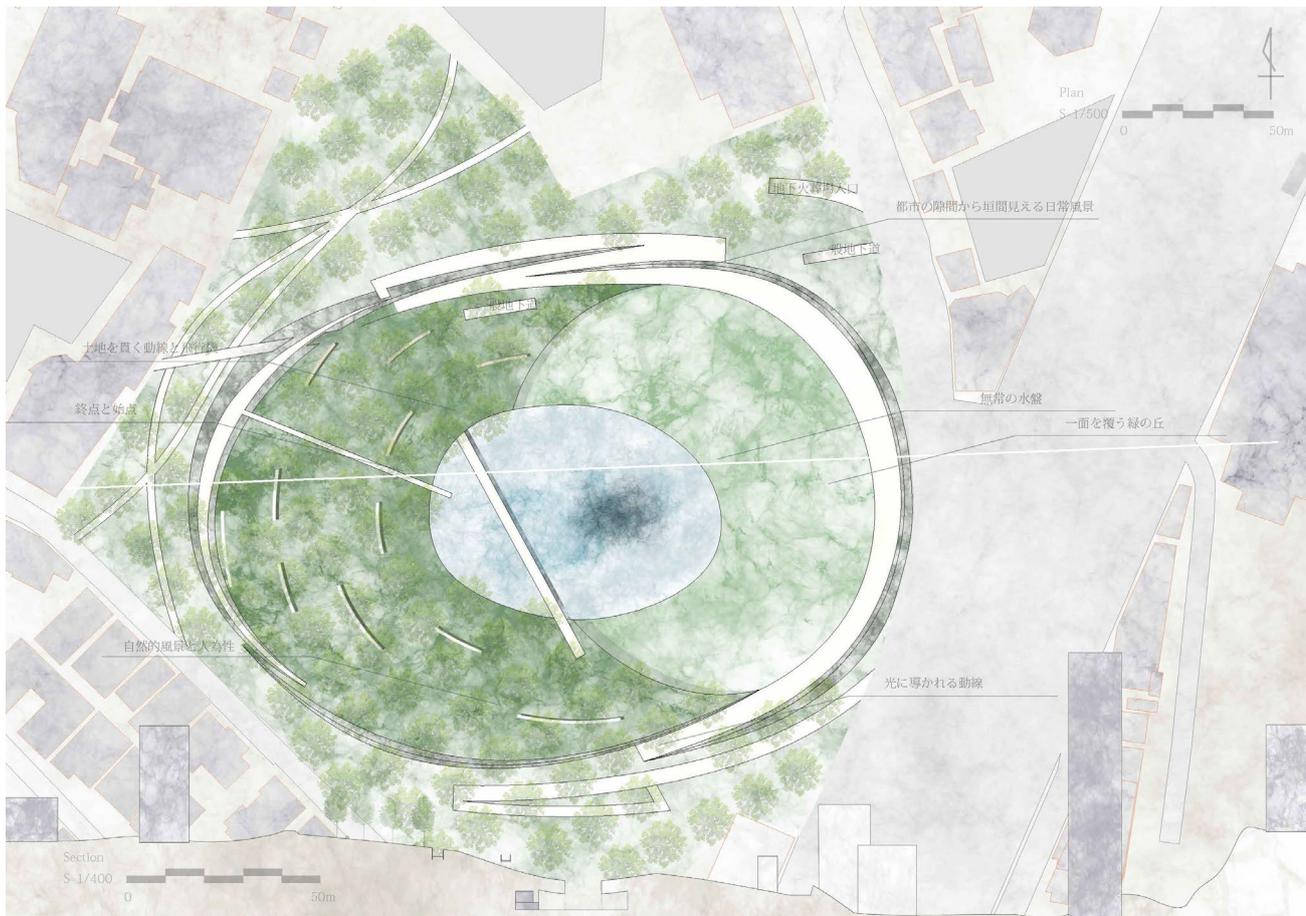
図5 日常と非日常の関係性



・火葬場 鳥観図



無常の水盤での景色



・飛行機が上空を通過していく様子



・バス停が垣間見える



・火葬炉に向かう最後の景色に都市が開ける